人を信じてかゝる心

――フレーベルを讀みつゝ、その解釋のため――

齋藤善太郎

「フレーベルのコツはこれぢやないかしら」と想はるゝものに行きあてゝ私なりに、何ともいへなく敬虔な心持で其れを仰ぐこゝろにならせられてゐるこころであります。

其れと申しますのは、一口に云へば底知れぬほど人を信じてかゝつてゐるフレーベルのこゝろ、とでも言ひませうか、とにかく、人の本質、本體をば無限に善きもの、として見据ゑ、つかんでかゝつてゐることであります。

★

かう一口に言ひますと、何でもないこと、でもありますが、コツ〳〵と「人間の教育」を讀んできて、ツィンメルマンの、レクラム版の「C、兒童期における人間」の章の終のあたり、殊にその一四二頁あたりから一四四頁にかけてのあたりに來ましたとき、私は「これだナア」と實際擊たれたのでありました。言葉の奥、しかも印刷されて、百年餘り後の今日、しかも私みたいな不確かな讀み方をしてゐるものにまで、その奥の方、底の方から、生きてゐるフレーベルのこゝろが、溫みと動めきとをもつて傳はつて來る感じがしたのでありました。しかも其のこゝろは、人の本質本體を信じきつてかゝつてゐる點では、「實に、ヨクかうまでできるもの」と歎ぜざるをえざるほど、無限なる感じがしたのでありました。

よく御存じの「人間の教育」の卷頭のあたり、（レクラム版のにして「A、全體の基礎づけ」の章の殊に始のあたり）これも實に燦

然として、いはゞ教育史のなかに輝く金剛石的結晶といふ感はいたしますが、しかし私としては、何かしら餘りにも麗はしき結構といふ感がして、そこを根源として一筋に流れつゞく理論も、ごつちかといへば形式的な感じが、ときによつてはしないでもありませんでしたが、そして其れに伴ひながら、ペスタロッチーものなどを讀むときのやうな、はげしく迫り來る、まことの息吹き、とでもいふやうなものは感じさせられず、何となくものたりなくおもはせらるゝこともありました。しかし、こゝ、すなはち兒童期のことを述べ終らうとするあたりに來て、「あゝ、これなんだナ、フレーベルをして、人間の教育を書かせ、また馬鹿爺さんといはれながら森のなかで子供等と飛んだり跳ねたり、させたものは」と、フレーベルの古典的いのちに探りあてたといふ氣がしたのでした。これが彼のいのちの全部だとはいへぬであらうとしても、かくとも其の溫みに觸つたとは云はしてもらへるやうな氣がしたのでありました。

★

そのあたりといひますのは、原文にして一四二頁のところで、それまで、一生懸命に、我々は子供の本質を伸ばし出さねばならぬ、子供の内なる生を拜み出さねばならぬ、といふことを、例によつてヤカマシク述べて來て、さて「此の年ごろの子供の本當の生活といふものは以上のやうなものである」(一三九頁下)、ではあるが、しかし實際を見るとなか〳〵斯うはゆかぬごころか、喧嘩はする、我利々々で、氣儘勝手はする、言ふことはきかず、實際、仕樣のないやうなのが子供等の實情でもある、と云ひながら、然しグッと調子を變へ、しかし〳〵本質といふものはソンナものぢやない、いや決して然ういふ樣なものではない、大體然ういふ見方は根本からしてウソで、アヤマリなのである。

「大體そんな考へ方をするからして人は人にむかつて神を(「眞理」と讀んでみていたゞきたい)否定することになるのである、なぜつて、そんなことをするからして神の爲せるところを否定し、したがつて神を(眞理をと讀んでみて下さい、その方が分りいゝから)本當に知るための道を斷つてしまふのである、そんなことをして(本當のものを本當には扱はず、また子供がやがて眞理にかなつて大きく成り出でることを妨げて、結局)ウソを、諸惡の唯一の根源なるウソを、此の世界にもたらすことになるのである。」(一四二頁上)

と、氣魄をもつて述べてゐるあたりからのところでありますが、そこいらを見てますと、彼の言葉そのもの、たとへ

ば、「人間といふものは本質上それ自身としては善くもなければ、またつまらん悪いものでもない、などゝ(中途半端な言ひ方に)云ふなら、そんな事を云ふ者は人間そのものに對する裏切りをなすものであり、人にむかつて反逆するものである、況して、人間といふものは本來それ自身としてつまらぬ悪いものであるなどゝ言ひ放たうとするやうなものがあつたら、まさにそれ以上の反逆裏切りである」、(一四一頁下)といふやうな言ひ方は無論のこと、なんでもない表現の端々にまで、不用意とおもはるゝ間にすら、人間の善良さ、本質的なる完全さを信じきつてる彼のこゝろが、生き〳〵と出てをります。

★

彼によれば、いな、彼からすれば、人間は、したがつて子供は、光の子であり、本來明るく、良く、たゞ〳〵、ほんとうであり、本來のすがたを生々と發展し出させさへすれば、そこから完く、正しく、善く、本當なるものが、子供のごんぞこから、輝き出でゝ來る光そのものゝやうに、かゞやき照り出でるのである、といふやうに、子供の、したがつて人間の本質を、はじめつから定めてかゝつてゐるのです、いな、定めてといふよりか、フレーベルにとつて人間の本質はすでに〳〵本來さういふものとして存立してゐるものゝやうです——ごうも言ひつくしませんが、いはゞ光そのものゝ世界がパアッとひろゞ〳〵とあつて、そこから光の子が出て來る、だからその光の子としての子供はその本質にかなつて育てられさへすれば、内に藏する光そのものゝ法(のり)にしたがつて、それに乘托しながら、パアッと明るい本當の光そのものに成つてゆくのである、とでもいふやうに、とにかく單純率直に、人間の本性の善さを、もと〳〵信じきつてかゝつてゐるのであります。しかもその信じきり方は、うらやましいまでに、確かで、明るくて、全幅的で、實に力强い感じがするのであります。比較はをかしいですが、あのトルストイの「イヴンの馬鹿」のイヴンの無類なる信を想はせられるのであります、理論もへチマもあるもんぢやない、「何といつたつて事實子供は光の世界よりの子供なんだからナ」といはんばかりの、廣い〳〵信の領域があつて、そこから出て來て少しばかり理論や方法やを述べはするが、そして其れも相當部厚い領域をなして、いろ〳〵の論理と經驗と主張とをそこに鏤めながら、信の廣い〳〵領域の外廓もしくは表皮をなしてはゐるが、しかし彼としての眞の生命のあるところは、その底知れないやうな「信じてかゝつてゐる」單純率直な世界そのものこそ、其れであらうと思はれるのであります。

★

いろ〳〵な本があります、とても巧く、人を引きつけ魅するやうな、また論理整然と、胸のすくやうな、またボツリ〳〵と、訥辯なやうでゝ、どうかすると熱をおびて、とても雄辯でしかも頭の下るやうな。フレーベルの「人間の教育」なんかは、この最後のものに屬するのではないでせうか。とにかく、あまり人を引きつけ魅するものでも、巧くてホロッとさせられるものでもないどころか、斯うもクド〳〵、しかも下手くそに、ゴタ〳〵と云はなくてもよささうなものと、僭越ながらフトおもはれさへすることが、あるのであります。それでゝ、何かしら奥の方に、かげの方に、ゴロ〳〵と鳴りわたつてる精神(ガイスト)があつて、それが一生懸命しやべりかけ、かたりかけ、主張し、說明し、叱りつけ、願ひさけぶ、といふ感じが、どうしてもするのです。その點では、私の語學の力のあやしさからきてるところもありませうが、ヘイルマンの英譯や、それにもとづくハウ原田譯の邦譯やなどは、とてもきれいな、スラリとしたもので、原獨文の方は、私には、どうもこんなスッとしたものではない、といふ感じが、よくいたします。しかし、訥々としてるやうでて、グッと迫るもの、またどうかすると莊嚴なるまで、たゝみあげられたる名文で、そこからは、雲間を破つてさしこんでくる光の集團がある、といふ感じは、どうもさすが、フレーベルである、とおもはせられることがありますが、一體それがどつから來てるるのであらう、とひそかに思はせられることがありました。ペスタロッチーものなどでもとさすがあゝいふ愛の人、熱の人、誠の人といふ飛び拔けてすばらしい人のものであるだけ、光に接してそれの輝きなり、暖かさなりの光源が、ほかならぬ太陽そのものである、といふことがわかるやうに分るのですが、フレーベルの場合、どうも私にはそれが納得いかんやうな、なぜなんだらうといふ氣が、どうしても殘るのでした。「人間の教育」なら「人間の教育」において、述べられてるることがらは、時には哲學であり、しかも其れは一應は然う彼獨特のものといふ感じのものでもなく、然う言はなければどうしても說明がつかんといふほどのものゝやうにはどうも正直のところおもはれず、また說明なり、そのために取り入れてる例なり經驗なりにしても、それほどパッとしたものでもないやうであり、一體、何が斯うしてコッ〳〵と讀ましてくれるのだらう、何かしら引つ摑まへて離さぬものがあるが、それは何だらう、といふ氣がしました。そしてたま〳〵此の「C、兒童期における人間」の章のほゞ終り近くに來て、そこいらはひとことほりは何でも無いところですが、そこを貫い

てグッと迫つて來た、もしくはチラリとそこいらで正體を見せた、そのもの、すなはち、何のことはない、モウはまりこんで子供を、したがつて人間といふものを、實は信じきつてゐる其のフレーベルの本心に接したとき、「ハ、ア之れだナ、正に之れだ……」と、ハッといふ氣にさせられたのでした。さてさうして今まで見て來た所やその他の箇所をかんがへてみますと、如何にもと、「人間の教育」が、讀まれる感じがしたのでした。これは、ひとつの言ひ方にすれば、實にナンデモナイことがらです、きまりきつたことであり、まさしく今更言ふまでもないことではありながら、とにかく私には、今まで見當つかずに、雲のかなたに、何かしら在つてしかも其れが生命をもつて今も呼びかけてゐる感じはしながら、いはゞつかまらずにゐたものであるだけに、莞爾として笑ひつゝあるフレーベルの顔にヂカに接したやうで、何ともいへず確かなやうな氣がしました。（こゝいらに到る、拙劣なる私の下手なアンショぶりは、實に拙いものですが、「子供の教養」の昭和十四年の十月十一月號に出してもらつてあります。）

それにつけても、フレーベルは、「よくもァ、まで人間を信じきつたもの」と、自分の足もとのことをかんがへながら、慶ましい驚きに打たれます。私としても、人の成長を見守るわざの末席にゐるものとして、人の本質を、若しくは人の神の子性を、時にはオメデタイまでに、心に立てゝゐるもします。しかし、イザとなると、すなはち、あまり歪んだやうな性情のものにふれると、「これはショウが無い、」ずゐぶんならせられてしまひます、スマンことですが、七度の過ちを七十倍かさねても信じて容すごころか、少しタチのよくないことを何遍かされるといふと、「コレはとても手にをへん」といふ氣に、ツイならせられてしまふのです。ですから、少くともさういはゆる「優しくある」やうにはみえないフレーベルが、しかし其の根、そのドン底においては、實に人を信じきつてゐる人柄であることに接すると、うらやましいまでに頭が下つて、「あゝいふやうに、ハァリコンデ信じきれなければナァ……」と、つくづく脚下を顧りみさせられるのであります。

★

ついでながら、しかしこのとき、彼の信はあくまでも單純率直なものであることを注意しあひたいとおもひます。所によつては、彼の生活背景の中に深く溶けこんでゐた基督教思想による言葉づかひなり考へ方なりが、煩はしいほどに出たり、また所によつては、あらはには言つてゐぬにしても、基督教風の神學神話を相當理解してないと眞意にせまつては讀

めないやうにおもはるゝこころも、殊に重要な部分に少からずあります。しかし何れにしても、一方には然ういふ煩ひに煩はされずにフレーベルそのものに突き進み、また一方には然ういふ神學なり神話なりの知識を有つてゐる故にそちらに重點を置きすぎてフレーベルを餘りに神學的に讀みすぎぬやうに、あくまでもまづ單純率直なるフレーベルの信にヂカにふれ、フレーベルによつてフレーベルを解しながらゆくことが大切なことだとおもはれます。そして、さうしてゆくことこそが、彼の深く大きい信に導かれながら、後の念願のごとく、後と共に、「すべてのものゝうちに潜み、すべてのものゝうちに生き活らき、すべてのものゝうちに支配したまふ永遠の法（のり）」のまに〳〵、ものみなの「本質」「根源」たる「神」に從ひつゝ、「神」に向つて行くことゝなるのであらうと思はれます。（秋の京にて）

お寒さの候いよ〳〵御健勝に保育の途におつくし下さることゝ有り難いことであります。

この度び「幼兒の母」を刊行いたしました處、かねてのお考へと幸に一致いたすことが出來まして、早速御申込みをいたゞき、刊行の微意をも果し得て、この上なき喜びといたして居ります。充分お心に副はぬところも多いと思ひますが、引つゞき御利用を願つて、幼稚園の家庭教育振興にお役に立ちたいと思ひます。

お禮とお願ひとを併せ御挨拶申上げます。

昭和十五年一月

日本幼稚園協會

倉橋惣三

尙ほ、一月號は四千程のお申込みを受けましたが、お知り合ひの幼稚園へ、更に御勸誘を願ひます。